

韓国農村集落における風水景観に関する研究 その2
—風景写真による景観分析—

準会員 ○山口 泰佑 ※¹ 正会員 佐藤 誠治 ※² 同 小林 祐司 ※³
同 姫野 由香 ※⁴ 同 野口 浩平 ※⁵

7.都市計画—6.景観と都市設計 c.景観イメージ・景観評価

韓国 風水 景観 集落

1. はじめに

その1に続いてその2では現地調査で得られた情報と撮影した写真をもとに風水景観の特徴についての分析を進めていく。

2. 研究の方法

現地調査で得た集落のデータをもとに分析を進めていくが、その流れとしてそれぞれの集落の google¹⁾や Daum²⁾の航空写真をもとに地形構造的な特徴について考察し、次に現地で撮影した写真をもとに考察する。それらを踏まえたうえで最終的な景観の調査結果とする。

3. 集落景観の地形構造的な特徴

3-1.構造的な特徴による分類

調査した13の集落の地形構造的な特徴を分析するため地形的な要素である山・道・川と集落の関係のみを抽出したダイアグラムを作成した。本研究では特に景観についての考察を進めるにあたってより大きな分類としてまず「閉鎖型」と「開放型」の2つに分類したのち、より細かな特徴にまで注目した7つの類型「合流点型」「背山型」「背山臨水型」「河川型」「谷奥型」「蔵風得水型」「山城型」³⁾に分けた。

3-2. 大分類

図1を見ると前半1~6の集落では集落の背後に主山となる山があり、それ以外の白虎・朱雀・青龍の方向は比較的開けていてそれぞれの集落ごとに川との距離や川自体の形、また道との関係に違いがあるものの広範囲を見渡せる点で類似していると言えるのでこれらを「開放型」とする。後半7~12の集落では集落の玄武・白虎・青龍方向を山で囲まれており、朱雀方向

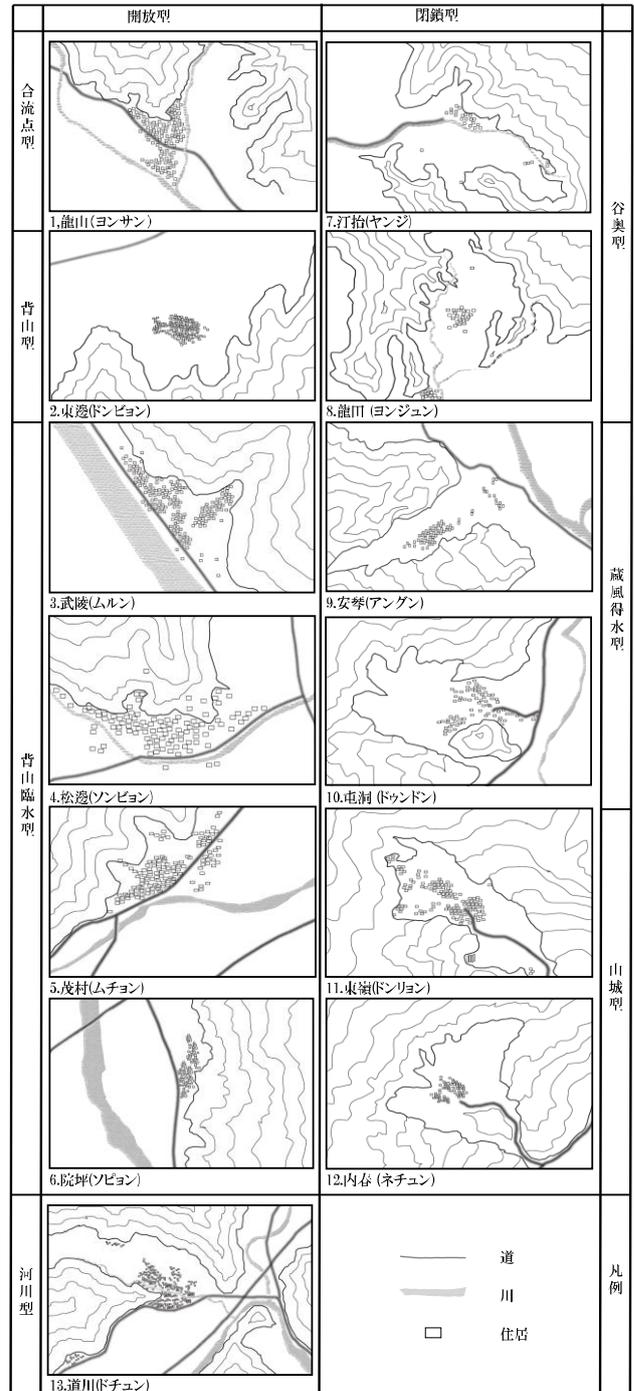


図1 各集落構造のダイアグラム

のみに開けて道との関係を持っているが、川との関係はないものや、あっても少ないものがほとんどでありこれらを「閉鎖型」とした。

3-3. 細分類

本節では類型をより細分化する。まず開放型において「1. 龍山(ヨンサン)」は集落が主山を背にして2つの川の合流点に立地し、川との関係が非常に特徴的であることから「合流点型」とした。「2. 東邊(ドンビョン)」では主山は確認できるものの開放型の他の集落で見られる川との関係が見られないため「背山型」として区別した。「3. 武陵(ムルン)」 「4. 松邊(ソンビョン)」 「5. 茂村(ムチョン)」 「6. 院坪(ソピョン)」は主山となる山がはっきりと確認でき、朱雀方向に集落と平行な川との関係を持っていて、またその川に並走するように道が走っているのも特徴的である。これらを「背山臨水型」とした。「13. 道川(ドチュン)」に関しては他の集落とは少し異質で、集落の中央を流れる川を中心に集落が構成されており、また集落外部でも川との関係を強く持っている。よって他の集落と区別するため「河川型」とした。

閉鎖型では「7. 汀拾(ヤンジ)」 「8. 龍田(ヨンジュン)」の2つの集落が玄武・白虎・青龍の3方向を集落に近い位置で山に囲まれているが、朱雀方向が比較的広めに開けていてその朱雀方向に向けて集落内から垂直に川が流れている谷間にあることから、「谷奥型」とした。「9. 安琴(アングン)」 「10. 屯洞(ドゥンドン)」では、3方向を山で囲まれているが朱雀方向のみ開けているという点では谷奥と変わらないが、集落内には川が流れておらず、朱雀方向の集落から少し離れた地点で大きな川との関係がある。これらの特徴をもったも



図3-1 線画化前

のを「歳風得水型」とした。最後に「11. 東嶺(ドンリョン)」 「12. 内春(ネチュン)」の集落は、3方向のみならず朱雀方向にも閉鎖的で川との関係は集落内外ともに確認できない。これらを「山城型」とした。

4. 線画と写真を用いた集落景観の見え方

4-1. 撮影の方法と線画の作成

分析の中で用いる写真は現地調査以前にあらかじめ地図と航空写真によって図2のように各集落外の四神方向において比較的展望のよいと思われる地点から集落を見る視点と、集落内から四神方向に向けての視点を選定しておき、35mmのフィルムに換算して55mmと35mmのレンズを用いて撮影したが、実際に現地ではあらかじめの選定通りにはいかない場合が多々あった。また、より広域を見渡せる35mmレンズで撮影したものを分析の中では使用している。

分析に使用するため写真を線画に加工した。図3に写真を線画化した一例を示す。こうして線画化することで写真内へ書き込んだ文字を見やすくしたり一定の要素のみを浮き上がらせることなどができる。

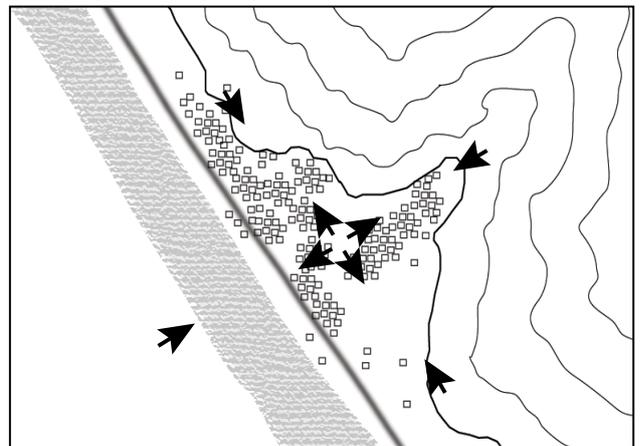


図2 写真撮影ポイント

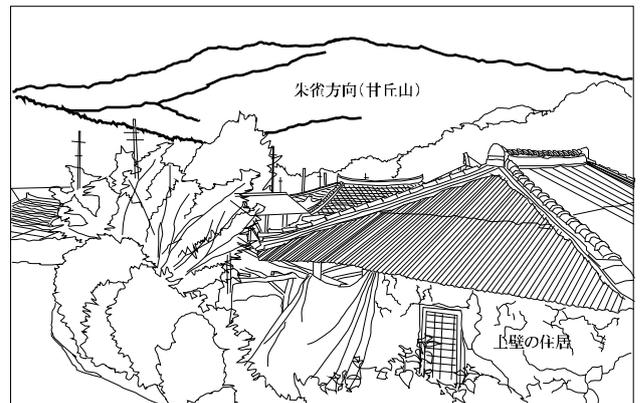


図3-2 線画化後

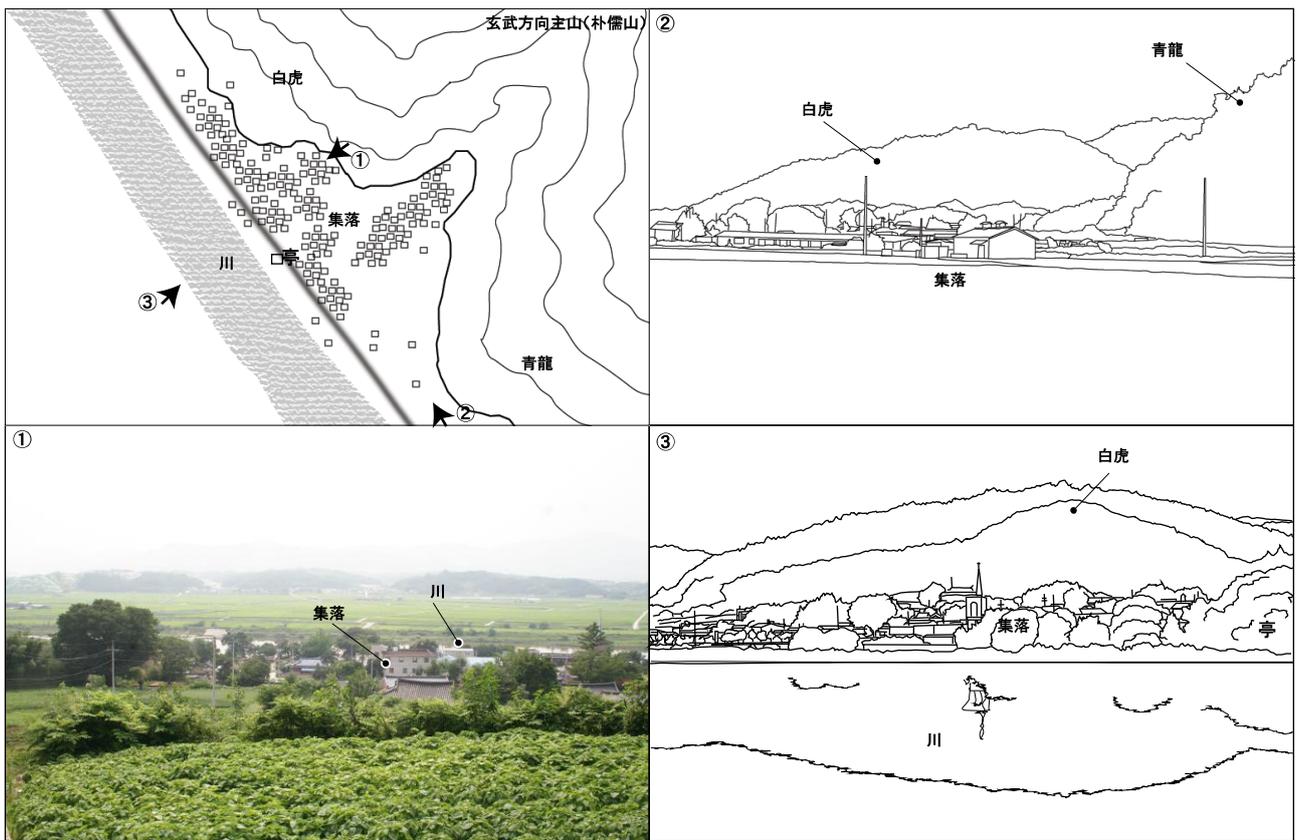


図4-1. 開放型—背山臨水, 3. 武陵(ムルン)

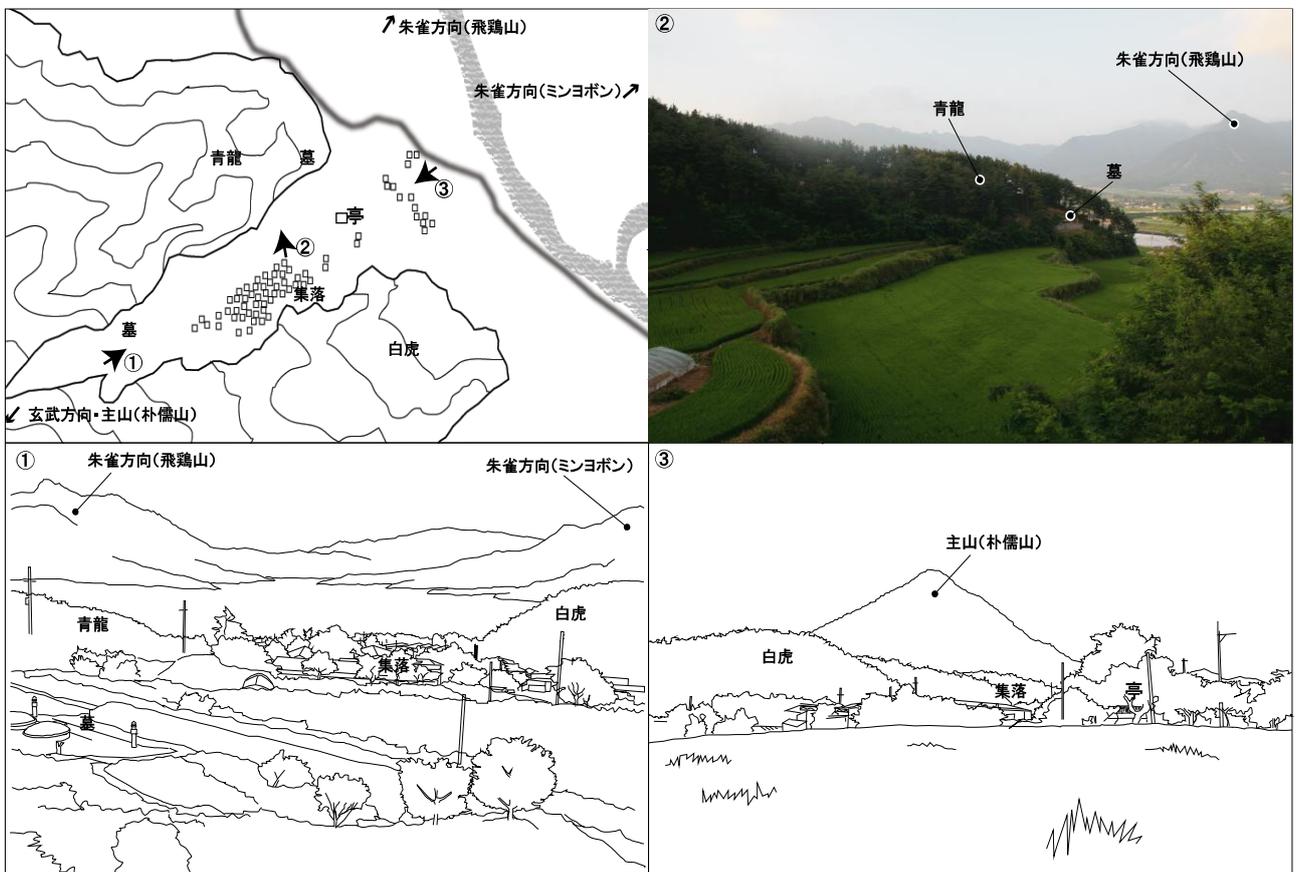


図4-2. 閉鎖型—藏風得水型, 9. 安琴(アングン)

4-2. 風水集落景観の見え方

今回の研究では「開放型」と「閉鎖型」の大分類の中からそれぞれの大分類の特徴をより顕著にみることで集落を詳しく分析することとした。「開放型」から細分類が背山臨水型の3.武陵(ムルン)、「閉鎖型」からは蔵風得水型の9.安琴(アングン)を取り上げ、それぞれ図4-1, 図4-2に示す。

集落全体図に撮影したポイントを番号で記し、それぞれポイントからの景観を3枚ずつ載せた。なお、より臨場感を出すため線画と通常の写真を併用した。

開放型—背山臨水, 「3.武陵(ムルン)」では①の写真から集落と前方の川が広範囲に見渡せる。山と川との距離が近い分集落が立地する平野部分から主山に向けて急勾配になっていて少しのぼるとこのように広域を見渡せる。また、②のように少し集落から離れた横方向の場所では白虎と青龍が集落を含めて一望できる。これは開放型ならではの特徴である。③のように川を挟んだ朱雀側から集落を眺めると集落の背景には小高い白虎の稜線が広がっている。この集落の主山はかなりの渡坎位置にあるため写真では確認できない。

閉鎖型—蔵風得水型, 「9.安琴(アングン)」では主山中腹あたりから集落を含めた朱雀方向を眺めた写真が①である。開放型とは違いなだらかな斜面に沿ってつくられた集落だが、集落の左右に白虎と青龍が確認でき、遠方の朱雀方向には対象地域周辺でも比較的大きな部類に入る大山がそびえているのが確認できる。また写真の手前あたりには墓が位置している。これは風水において先祖の霊を風水の気がもっとも強いとされる位置に配置するという理論に一致していると言える。②の写真は集落内から青龍方向を眺めた写真であるが集落を囲い込むように青龍の稜線が伸びているのが確認できる。少し視点をずらせば朱雀方向にも山があり、見渡す限り山々に囲まれているという状況が分かる。またこの稜線の中にも墓を配置しているのが確認できた。③は、朱雀方向から集落と主山を見上げた写真である。この集落が特徴的と言えるのはこの地域でひと

きわ目立つ朴儒山を主山に構えている点だろう。青龍は手前の木々に隠れて見えないがその後ろにあるので、集落が主山の裾に位置して白虎と青龍に包みこまれるように立地していることが伺える。またここからは集落の手前に亭があることも確認できた。

5. 総括

風水という理論は非科学的であり気の流れがあるかどうかを証明するということは不可能であるだろうが、本研究で調査した農村集落では地形構造や集落構成、風水的な要素の分布において確かに風水の理論に適合しており、そこに風水を感じることができた。また実際に撮影した写真にもその理論に一致した要素が写りこんでいる。

風水の理論に実際に適合している農村集落でありながら、さらにそこに住む住民たちが風水の理論を知っておりその理論によってつくられた集落だという意識も高く、またそれを誇れることだと思っていることは人の心と景観が常に同調しているということである。

気の流れがあるかどうかに関わらず、その地にすむ人々が意識する理論によって構成された景観に常に抱かれることは人々に安心感や安堵感を与えているのではないだろうか。

謝辞

今回の韓国農村集落現地調査に際しまして韓国農村集落住民の皆様のご親切とご協力を頂き、大変お世話になりました。また、釜山大学の李仁熙教授、金興萬さんには現地での調査のサポート、通訳等の支援を賜りました。ここに記して、厚くお礼申しあげます。

【参考文献】

- 1) 「google Earth」, <http://www.google.co.jp/intl/ja/earth/index.html>
- 2) 「Daum」, 韓国地図サイト, <http://local.daum.net/map/index.jsp>
- 3) 渡邊欣雄・三浦國雄編：「環中国海の民族と文化4 風水論集」, 凱風社, 1994

*1 大分大学工学部福祉環境工学科 学部生

*2 大分大学工学部福祉環境工学科・教授 工学博士

*3 大分大学工学部福祉環境工学科・准教授 博士(工学)

*4 大分大学工学部福祉環境工学科・助教 博士(工学)

*5 大分大学大学院工学研究科博士前期課程

*1 Undergraduate Student, Oita Univ.

*2 Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng

*3 Associate Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng

*4 Research Associate, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng

*5 Graduate Student, Oita Univ.